ル 2
1368
4

門 8
1.368
4

環海異聞巻之三

匣哥都鈴（ヤコーツカ）

十月十三日ヤコーツカ」より不知島
オホーツカ」より 日本和三十日足詰ふ
島の様子 出立仕度厳重に節有道場ふ
おろす五十日 船にて島仕度 日本粉九二千斤
程なおろし物 味噌 石作 味噌 拙者 作者

九月廿五日 組上ケ作り立ル所ハ 指置 高さ
麦餅 牛肉等と 喰へられ 始ル

一人ハ 木作り 石造り 屋根 板
寺より外 おし 森作の仕方 イルコーツカノ不 委し

一寺ハ九ケ所 寺作 佛 弥 並ふ寺 僧の 振子
イルコーツカの不ふ 詳 あり

一 ふ四十日 餅 立ル

一 ふ中 寺 乳ふ 傷られ 臭 凄 腐こと

黒 書ふ 医 ヒ 醫者を 振ル 不 外 神

寄 杖 男 の不を 縛 て 抜き 切り 生徒
ふれ 手 書 被し 書きて 被 療法
と見ル 逃と 見ル 日 ふて 六 振の
病 無 安 ふ 変 ふ と 不 見 ル 不 と 以て 見
形 作り 縫 ふ 紙 ふ し 杖 て 歩 り 被
者 イルコーツカ て 毎 見 書 ル

十一月廿四日 ヤコーツカ 出立 イルコーツカ 赴キ
十五日 ハ 大抵南 向 て 振 行 代 友

ヤコーツカ」ハ宿場ニ拾軒ノ家数ニ
付

一ニ軒馬継ハ彼里数ニテ十里十弐里十
八里弐十里廿五里位ニテ宿ニ泊リ
一宿ニ駅場ノ名ハ「ヒ」ニ見ヘタル細オリョクマ」
ト申家数三百軒程ニテ代官ヲ立番
寺ヲ置ク故ニ名ヲ京作ヤコーツカ同様ト
見ヘタル又「ケレーゲシ」ト云ヘル見ヘ

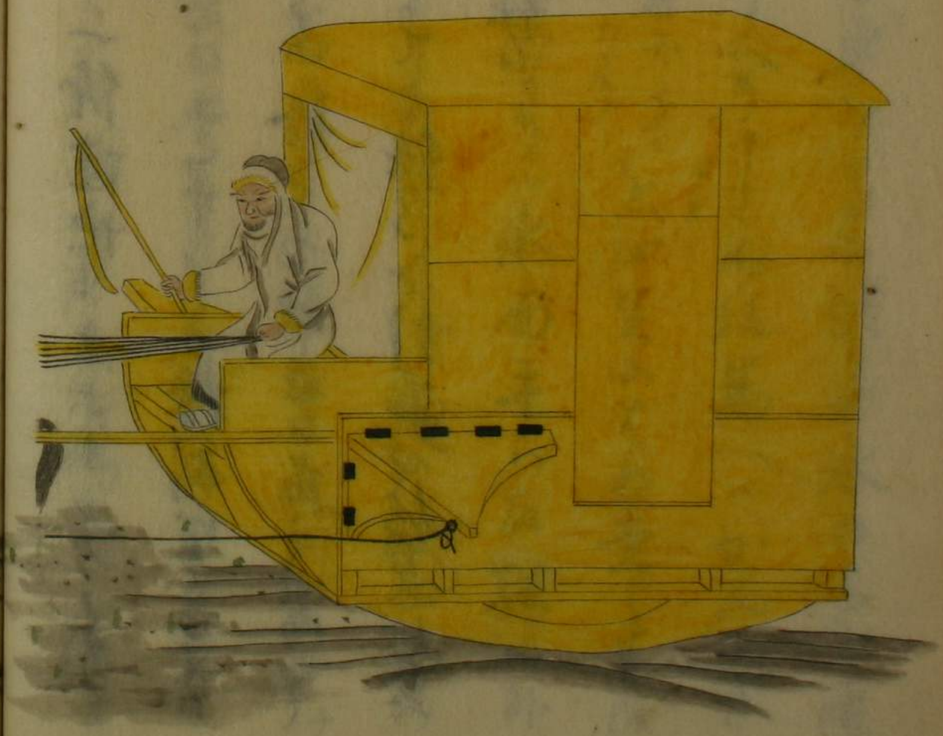
オリョクマヨリハ家数少ク寺ハ二ケ寺ある
ヤコーツカ代官ハ同ハイルコーツカ」ヨリハ
九百里ほど前ト申
一道中ハ農ヨリ雪車ニ乗リ辛セ
ヤハ乗ハ徒場ノ寺近ヨリ四足或ハ六
足ニ成ヤハ
一此道中イルコーツカヲ大河川つき川
筋多ク流ル故ニ氷厚ク成リつあハ

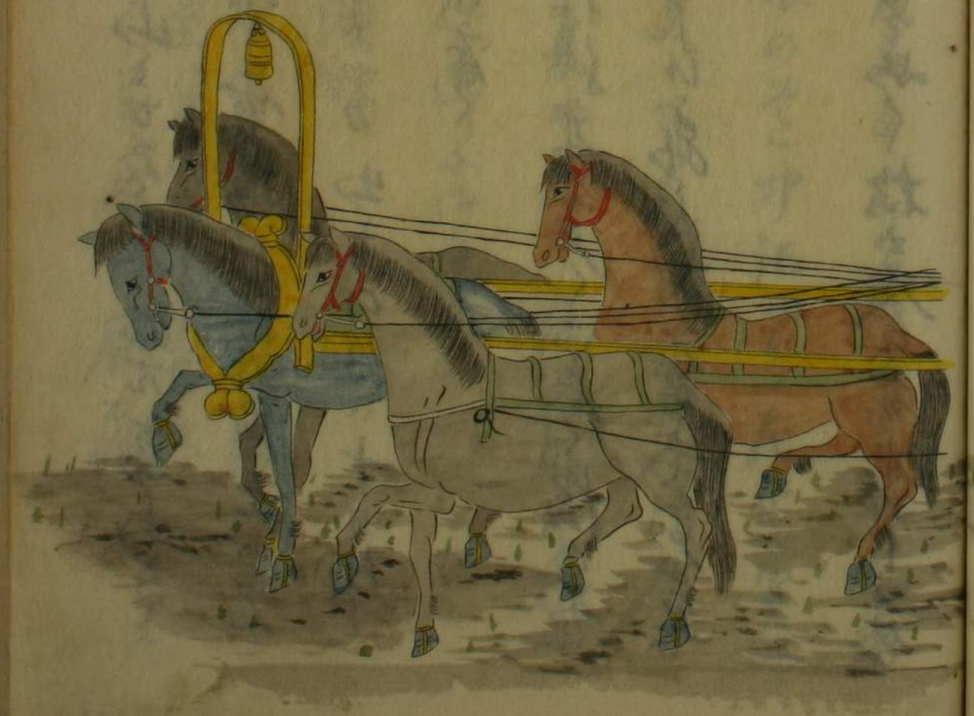
雪車（ソリ）をるふ氷の上を通
行仕候ものヤさぬ馬（いかんぎ）
先キの方三角ふしてを四ふたあ者せ
六七分の長さなり
雪ふく陸よりい氷面平らなる球の外
なしたるもの中に但し徒歩の駄ふ雪
ふ先キ不なるり上陸仕候又川の井チ
不ふ氷り雪ふりて岳（カカ）のなくなりて
通行あるる紀不出発に場所い陸を

ひらせ中い一体陸地もオホーツカより
ヤコーツカ迄の道中より格別宜く出発い
馬ハ先キ三ふ鈴をつけ出発ふて
先キの驛ていい徒ふを引き結ぎけ
通行仕候

人の乗ところ雪車(ソリ)と
四足ハ馬まて河氷の
上を乗すると図

雪車の前ふ脚を五つところ
人ハ馬奴(ムマヤツコ)あり皮紐とつけ
鞭のやキ物と以て馬足を進む





一道中ハ大ふ山ニもアラズ高山ニテ
不ハ通ハ路ニ雪降積ル土ハ人
ヤサシキオホーツカ出立ノ後ハ十日ほど
土を人ハ食ニ成
一大ヤハ通ノ松ハ木ハ多く植ノ木ハ
杉ニ見事ナハ樹木ハ不見ず人家
不アル

初めふ作せるめく指ス人の者オホーツカ

を三度ふ義豆ニ成ハ大ハ儀平常第壱番
立ハて毛槍ノ毛中ハ紅なり右手ハ第二
番立浦ハ支ハ第三番立右人同乃ふハ
なくハ好見夏ノ乃丹ハ乃ふハ生ル
服ハ紺ハ乃ハ通ふハ浦ハ
出立ハ順次
寛政七年乙卯八月十八日　儀兵衛
オホーツカ出立翌八年丙寅　善六
四月廿四日イルコーツカ着　辰義

寛政八丙辰年六月上旬
オホーツカ出立同年十月
イルコーツカへ着

左太夫
銀三郎
義次郎
左平
太十郎

同年七月三日オホーツカ
出立同十二月下旬イルコーツカ
へ着

津太夫
清蔵
巳之助
吉郎治
市五郎 ヤコーツカ立て病死仕候
八三郎
民之助

一津太夫ヤ上ル オホーツカ出立ス帝ハオロ
シア人宮殿ヲ人ハ拝見ス七人生死ハ
馬士ヤコーテ馬格六七疋ヲ乗ル辰ノ
七月三日オホーツカ出立同月廿九日ヤ
コーツカニ着仕ル
一ヤコ平屋の間そうりみて馬ハ疲労ハヤ
ませハ拾疋ハ疲ふ病ス 疲ヲ出ス仕
一馬の飼料ハふくき麦不仕候ヲ者ヲ

為喰ハレ響ハ日本の通人ハ其ハ鞍無
荷を附ハるハ仕無ハ松ヲの結方ハ
ヲフ國ニ荷ハ附ハ物ハ諸反具食物類ハ
行ハレ牛の皮袋ハ入シ中ハ荷物ハ
駄賃ハ訳ハ目程ハ荷附るの上ハ人
といのセアさすヲハ
一ヤコーツカ是ハ山ハ多ク笹根山
なとより高キ不所ハ高キ反箱ハ
定ハ通り毎ハ筋ハ つき居ル先ハ
ハ立ハ馬ハ先ハ乗ハ 付ル事夏ハ
ていハ中ハ山谷の反ハ雪ハ
氷と波ハの中ハ居ハハヤコーツカを通
中ハ多ハ程ハ不ハ 先ハ笹根ハ
ハ乗ハ不中ハ小松立の不ハ
ハ通ハ不ハ
一松ハ日本の松ハ

第拾冨士松ふい大木あるはるゝ二葉の
松もはえい

一山櫻はえ枝ハ不豆にはえ川をふさ
何とやはえ柳ふ似ふ木はえまつふの
類さして変りの乙書ふい

一蟻い多くして外れ書記乙ふけふい

一蚊い芝井ふ駱はえて形ちはえ摩
き生ふい屋の角ふて多く見る蚊き

第拾ふ多く出はえ馬の毛ふて帯のめくる藤
ふる物 セイチカ図ふ載を類ふあて往来往イルコー
ツカ杖ふ山ふ入ふ者皆付物をめふる蚊い
人星ふい居ふい

セイチカ図
蚊を防ぐ冠
ものの物

一七月廿の道中仙台の八九月廿の事候
終ふ見へ申
一イルコーツカ迄の内市ゴ所ゴ往来の病
お頻後ゴ醫師と申し療治致呉申
水薬を飲又毒き草実の煮き物を
致ます 梅營實(イバラノミ) 迄て同ふ お建ます 病(ビヤウニン)
院(ヘヤ)に為る稲茅用ゐ致ず 拙者共も 為て元
中ゆ実ゴ病人二三十人も 即死申ゆ行れも

の出立を引立て亜ゆ所ゴ同ふ浮屠ゴ 生来
迄て事ゆ終ゴ 中同ふ 病死
仕申
一右手ゴ 上ゴ 呉ゴ 中ゴ 用 イルコーツカ迄 七百
里も申ゴ中す 多ふオスコタ」と申ところ
出発ゆ 同ふ 七八万程ゴ 地陪ゴ 慶ふ
井戸も 下 池水ゴ 車仕無 て 生水を
汲あけ 桶ゴ 通し 全て 流し 全て 煮申

山海堂なりとされ山堂と中物と又は
中山道筋の諸国山堂と唱へ中山道
堂和名抄に潮堂と書いた堂と
何れも無西堂なり
一ヤコーツカよりイルコーツカを武千五百里也
大川續きの芝郡なり

伊尔歌都加（イルコーツカ）
寛政八丙辰年正月廿四日俄国船長六
辰義三人お搦イルコーツカに長崎遠奉行
の役人に受取受日本通詞の者出ふ
所生源長次郎の次第お尋られ此時お海
事安雇れ上野国中井村飯掛として
一月ふ銅銭三百枚お渡され大和ふて月と
交替ゆ 婦住中山

一三人共ニ一所ニ同居仕ル方ハ別帳ニ書ス
所生無之通同役トコロコフ」ト書方ハ特宅
同居仕ル様ニ変生候様平生人ニ不取扱
特ニ中ハ又生後トコロコフ」方ハ相極ル善ス
辰義出人ニ不居就ル事ハ無之ト稱婚
仕ル訳立ル者ハ家長ト結婚十月ニ変生
銀ニ席茂治席共事ニ十席五人ニ成仕ル
合合三四人ニ不成ル居十二月末

法変清義ニ成ル所ハ三席ニ成ル人
成ル場合ハ四人共ニ相ル上彼方ニ何ト
法ニ成ル場ニ当ル通同役ニ一所ニ
成同居仕ル方通同役ニ成居宅ニ三坪ニ成
て計坪ト相成ル坪ニ使切ル坪ニ同居仕ル
食物ハ不ニ不取ニて相成ル極此不ル元て
二ヶ年程所生何ニも相成ル所ニ名ニ宅仕成
相成ル変又行ル評議ニ成ル相成て ニコライ

伊勢新義
事ニ

宅ニ付トコロヲ宅ニ為ル二ケ所ハ
其所居ル者ハ多年ヨリ太の通ニ数
所生ル又生涯自分借宅ハ所生度新指生ニ
中山愛右衛門ニ二ヶ年ヨリ
雇拵稼中山 六人一所ニ居ル 外十五枚の借賃の所生ル

一又生涯当所ニ大商某ヲ中老家ヲ佐藤平
原ニ貸ヲ無ヲ所ハ市太の人ハ居
ヲ借賃ヲ不ヲ所ニ依テ生涯ニ二ヶ所

ハ借宅 佐ハ又野ニ借宅ヲ所ハ居ル
者ヲ出シ佐藤平ニ貸ヲ 外ハ人ヲ出シ三月借
右居ル所生

一辰ノ十一月 右手 等当年年寄ニ年年運ニ年
馬ヲ出ル紙ヲ引無ヲ出ル拵ヲ前ハ生
所生ヲ出ル人ヲ人ヲ出ル人ヲ人ヲ
低く眼の色ハ黒く つ 肥容子 ヲ ヲ 日 ヲ 詞
ヲて何ヲ通ヲ佐ハ 偽装束ハ ヲ ヲ 彼ヲ

姿ハ世間に有不審に存し居候ハ少何の方々ハ
世間にやと疑ひ人の答ハ世ハ審に成
世少及も無私ハ日本伊勢国新義と申
者にて先年漂流し船頭光吉と申者と一同ハ
江戸へ参り居光吉写ハ国にて記し集ハ此
地ハ殊に長崎にて世間にて指て指子
有之中ハ仍て又元年中ハ私共ハ去丑年漂
流致し不申年ハ年数物光吉と申人

オロシヤ船にて松前の方より送られ候新義
と申者江戸深川にて取調ハ居候ハ一通ハ
筆中ハ之にて先元本新義ハ拙ハ一向存申
不申候ハ一向存申
拙僧の次第書ハ中ハ拙ハ不思議の面会にて拙中ハ
にて居子新義同之同人宅へ連れ参り新義
家内妻ハ為迷ハ右者何ら接拶ハ無
云語通し不申候ハ此ハ光吉の儀年

学位授ケラレ、ハイトルイチ、コロテゲノ

一新義今ハ名ヲ　ニコライ、

ヲ以テ日本文字師匠ノ役ヲツトメ土地ノ学問

ヲ教ヘ師匠ハ〻〻〻〻

書附幸子ハ男子六人ヲシテ銀四拾枚ノ完

納ヲ中ハ漂流人ハ帰ル事ノ係リハ用

向モ記事ハ為ヲヤカ加場〻〻ヲ百廿枚トアル

何モ都府ニ出ル分係ハ向ハ義

ヲ以テ又加場〻〻銀弐百四十枚

ホヤ分〻ハ自國王樣来　羅紗冠帽（ボーボロー カブリモノ）と云

官ホ進ム時ハ皮ノ帽ノ樣来〻ハ安

位等ノ高サヲ張ル仕ル星をつけるものゝ　且ハ官

職ホ為ル分ハ新鞭帽等モ上ヨリ被ル被ル

悉〻〻銀五十枚年〻場ノ時悉書寅年十

二三年ヲ〻〻〻

新義書第四拾二三ヲ屋〻〻妻ノ名マレウヱヤノ

ムジヘイカナ、男子ハ人女子ハ人　生ノ見　仮名書ハ

洋名中略ス

落あと爲る子女の名カチリナ、エキフモオナ、家
三十だりと云事新義日本學いろはより優
出仕出来ふ様子ふ様子オロシヤ辞並ふ使こ
書のるも能学ふ様子て入組ひ金令の為こ女
色一件新出来ふ出キ物写も彼方の文法の
ろなれい自生ふ講学ふ様子なり

一日本通行録 エコロ、イワノイチ、トコロコフといふ

人始めい町内村方れ間歩(ケンタチ)の役 検地割 を初め七拾
五校の完形ありしと 先年勢物光を支写送り来
り事能りし時日本通行録ふヤ様子ろ出ない五
六十年ろり以前南部田名部の寺より流
沙地の永位と為りし事ない居り 行り イルコーツカの墓ふ行門
徳三郎と彫付ふ石塔あり 又享保十支子(ヒノエネ)年 埋滅 行と彫りふ
日本宗の石塔あり是写の様ふ
佐井村久助といふ人れ出し又事ふ
某の年漂流して彼地一寺為り
内寺こし竹内
実記ふあり

[illegible]人ふ流し十二年より十七年まて

日本紀略しるすあり正月朔日天皇
殿に出御ありて元日の儀行はる
年号を改めて先年号を改めて
先年号を改めて其年号を
ヘリブイチ」といひしなり
正月朔日の上表に和印よりつく銀四百枚の言ふ
中略ら〻候て書付も川續日本通鑑にて名佐
老拾もあて拾五両拾匁いくそ
は遠にて洋りの出来三ヶ年の百ヶ年迄ふ三年ら日本紀
一冊ふ千二百枚文ふらりとふ咎も文にはよし

（日本紀子史て古沙匠某の子も
古老古文匠りの形ふ京組

如帝死去の序
は絵張海りら

紀い書物ありて
ふれも中し拾不拾ふて多し新きりのたなり一ツ二ツ
中ひを以方よりふみ拾拾れい兼答ふい拾度は
たりなり拾あい日本人中の書留め中のも古本は
面しか つて多ひ中ひて書分ひるのも不佳て元て新
義ふて百ふ答ふ所と本存は

和ふ日本紀八年政穢古ひと中者ふも出産
庶對仕ふ是一向拾兼ふ

番所家数 三千軒程あり 奉行五箇二三人
ありと 学問中興ありし 三四年置交代せり下役の
者幕吏総千八百人程町年寄といふ学者を
ゴロジニチ」といひて 老人何も 寺い拾三ヶ寺 凡て
家作りい 石造りく 木造りも 多し 外屋已来の南の
方ふ 高き山あり 西より北へ 回りて 大河あり
川幅 広く ヤコーツカ川方へ 流れ 此川 拾壱月
時 氷厚サ 弐三尺程 氷解 春かすみ時分ハ 川筋より 水蒸発し
外 もやけ立 ありめくみて 人の面も見へ分ぬ
程なり 土地の 厚サ 凡四里程あり 此所より
国の新都 ペトルブルカを 七千里 実ハ六千七百里
唐山界 立 百里程東北の端 ヨリ地カミ
シヤーツカ 我蝦夷諸島より北へ あり オロシア領土地 つきの 海辺なり 凡て 六千三百
里程 あり 此 總州 都の 名 ある トボリツカ」
及加山と云 あり 東北方 ブラーツケ、ヤコーツカ、

オホーツカ、カミシヤーツカ、等の港地から五六日程
千里の間は無人とシビリ　止白里と申す所無
物皆寒気甚敷夏中極暑百五六
七月の月は暖気ともなれば　イルコーツカ
なりに少し南へ寄る地方暑の百分此夏
とも百分氣候の相違致す極寒所近年の御
中数十里は百姓ブラーツケと申す所これ　オロ
シア本領と称し不申前より土着の種族

みてはなく　は人々ハ眼の色黒く身材も低く
オロシアの人物とハ大ひに遠し中ハオロシア人
追々は多く土へ集り立続り付ケ始め町々も
オロシア種の人多く有之仕合は中々は
不分とハ皆オロシア種の人なり仕合仕且
市中おハ他国の商人も追々来る　は所の
人々ハ近御ふり入来り土地の者をブラトツケ
と唱ひ　ブラーツケ　を基野鄙ふ出来る

いやしめられやすし 去る徳も芳ばしきゆへ
辞と書し宗旨もオロシア一統の宗派なれ
去衣彼飯食も遠ひやすし 俗を捨てオロシア
辞も用のゆへに経いつゝし衣彼も羅紗の類
おもひやすし

当年十四人の者八ヶ年遠国苦難のゆへ
四ヶ年めにて吉帝坂病死 史反抱くゆゑの長
十三人となりやすし
くゆゑ伝て 後て類多ふくし 帰りやすし

去ふ徳に此地のゆゑ妻くを望てへて無
玉れ風俗も捨て おくりやすし

街衢居室第一 町小路並人家之事

此変宮居の左右四里程ありて 一里塚あり
彼玉の里数 以下同し 家数 三千軒程 町割整ふ
町の角〻ふ寺あり 別ふ町の名といふものと

きなる寺々の名をいひて往来と云ふべし道幅狭
きハ七八百歩きハ車三ツ並べ通らざる程の不ハ
何も屋作りハ石屋も木造りもあり共平石屋
も多し皆二階屋なり十三ヶ寺の寺々ハ皆名
造りなり銘々の屋敷構乃廣狭ハ分限ふよりなり
土地の大小ふ住居のうちハ菜園あり菜蔵
(カブラ)蕪菁煙草(ツクリ)筆と種植て丈夫一軒屋敷
ふても高き塀きりなしの無粉ふ合せて

町小路も廣きなり魚の町ハ別ふありて青類
なり賣り居れ並び居るなり又家畜の類ハ
市中の小居ふて牛町ハ町ふづれふあり
不ふ一軒土地の無ふ所ふ開きふる不ふ
芝居町(カザルマ)ふ病院(ビヤウヰンベヤ)鍛冶屋(カジ)なきハ町ふ寸里
なりなるれあるこ乃持ハ銘々の住居とあ
きるひ物商賣の不ふ多ク賣物なりある
不ハ大居小居ふりてあり住居ハ宅ふ

至の内生平〳〵代番所出張して高値し
疫ふい番人をつきて鎖め置き江戸の柳
原四日市松の弼て大小の居ヒヶ所あり
大唐ゝ石造り小唐ゝ木作りにて唐ゝ二方紹
の月簾あれ平を通行あすなり
一石造りの唐ゝ先ッ無関の月数をおチ生
廻り前ふ内れ役所の仕和をあす角き
通りふ土蓋をすめもいふつき平を皆厚

閉り生内ふ石を詰めあり蓋て穿き堅め
生上ふ赤川くいのめき物を流し平らふし
イツフェースカ下ニ見ル
て又石を並へ置又赤つくいをふうし如形
すゝの粉通地つゝ硬く紙ふあり時
切り石をすへ穿て付石す面をり作を接
以二つてあゝぶつれよき方い面とあ
の内面ふ向け生赤石の月つい小石の
類をつきて穿き堅め如内ふ作と石二ツ

つを主根築上まで先ず五寸厚し附先
二ツ金の石根あり幅し厚サとの厚き
尾を除こつき根ありなり石尾先主根
めれ万〳〵イツウエースカ」といふ石原
の巻きもれを置て下尾の上面と上ハ尾
れ下面とを粘(ネバ)しつけなり(イツウエースカ水を和したれ)
粘り気の生ずる物こ詳事
あす 板二階ふなり而ハ巻き方九寸を
ラ〳〵し並べ先上ふ板をなり又九寸を並
べすきあり〳〵を右石原やうれ物をなり
うめ先上ふ土を去計置又その上を
板みてなる 板内住居の石席住物〳〵
の下ハ無石の築立れ〳〵て築石
の壁土基なり出先石こつき根めの石
ハ隅を多すのす法ありて巻き延べ鉄
を巻れ〳〵ふこ先角を通し先方

くさびみて かきめるもの これ間障子仕切い
ゆえに 此筆法ふ 行せ前浮 たち人と
の 猪毛ふつ 多ゆ 幾百もあるなり
抽斗根〳〵 尾を置 板ぬきて
玉都(ヒヤ)の方い 斗根〳〵 尾を置くなり 此地にて 趣 新
斗根〳〵 置尾い 第作不出来といへり
のぬく作りて 内外より 考つくいを 塗
出 白ぬる 塗斗造りとなる ちよき 彩ふ
ぬりかけ 窓あり これい 板 磧(イシドロ)子を 仕
ものも 又雲母(アラビアガラス) 傳ふ 一ぬり 出上下 趣
板 ふ 人と 信 ふい 二階 戸い 大
抵上 戸 但 ちい ふ 蘭 ふせし
もあり 下 斗い 黄 (タキ) 寵 新 紙
毎 する 不 す 又 穴 ぬ 一ぬり 焚き出し(シムーヤ)
斗ふ 様 もあり 下 斗表 百 口い 皆 上 戸 本造
の 赤い 土 斗 の 下 ふ ふ ふ 堅 大 九 太 井
柳ふ 但 上 ぬ ふ ふ ふ 仕 方い 元 九 太

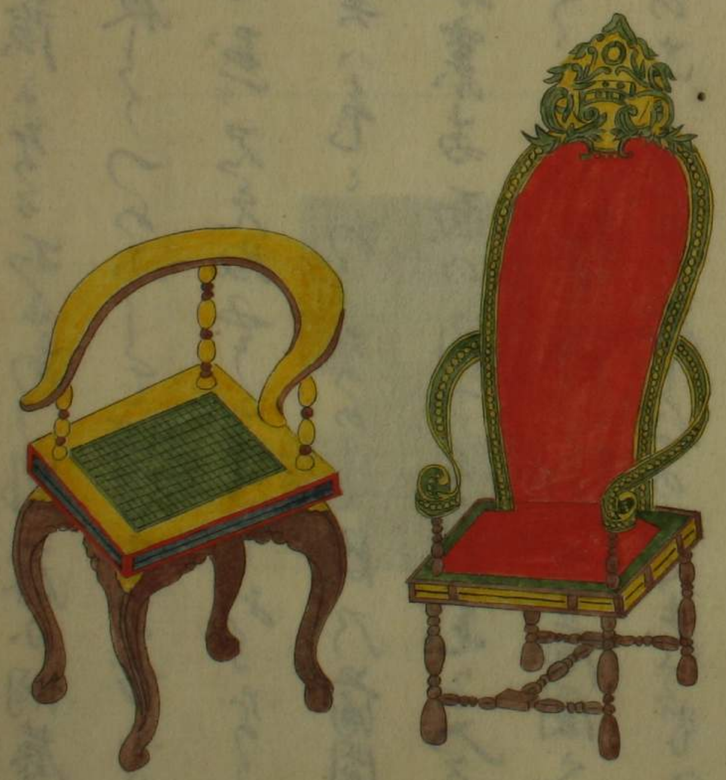
市松金目の下タふあり九ちふ上れ方
ふ長く溝とりて上への水れ九ちを受て喰
合ふ〜ふ〜幾重も〜一つゝねあり宝れ方
高ちく〜し出来上りの下ゆて内ゆり白
土を塗り事石臼ゆ同し井桁ふ組上り
ゆりかゞ〜四隅ふ陽ふ出てきなり柱建ふ
作り高作ゞ絶てあきなり
扨各ゆれ内ゆい幾下も一万〜ふそのの

偶の下ふべイチ 灶（ヒドロ）といふ物を設く先作り
方い先ッ下地ふ高尾を並べ四面の内一方
ふ火を焚く竈口を開く拵ふ〜三面よ
リ石ゆて築き竈ゆ上つくいゆて塗り堅む
先間ふよりて大小あれども大抵横一尺
竪一尺ゆ程ゆあり煙出し高根の上へ
ぬけ可拵ふ高サ三四尺なり出し口を
細ゆくつけあり竈口ゆ前

指入れ事ありて煙突（ケムダシ）より大煙とぬき
空（ソラ）へ出すべし扨煙突の中人れ方にて
せいの高く程れ不ふ煙を止めず蓋（フタ）行り
大烟を出し掛ふる程合行りて蓋（フタ）を
かぶせて立れる烟をとらず竈灶の内れ
新煙へ仕事の中禁薪ふとり
のけ事ありて竈口をふさぐ大の上れ煙
出しのはも蓋をかぶせ上に置ことを閉ち
塞（フサ）ぐなり　大火（オホビ）をもやしたる時ふ烟
を止め内ふ大氣を包みたもつを以て温
蒸れ氣灶の外へ出もれ出事内充満の
内ふ満ちて強の外温暖ふなること此物い
土地室を成内ふ内を温め室中暖氣
かぶしむるふ設けたるものなり世間
毎ふ此物なる故ふ内高く深カ成て繻
紬一枚ふなりて絹を手業（シゴト）となし居る

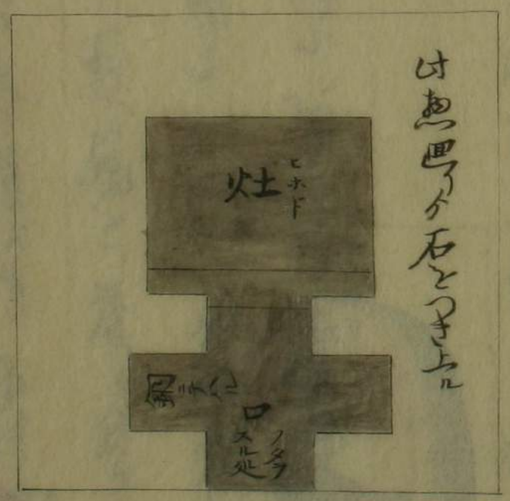
所々我〳〵の座のゝふ達つけぬ先〳〵の
月〳〵をもめきて紙をもかんぢ居たりき
一京の内男女たゝふ椅子(イス)ふかゝりて居る家
あふ産業れ内数〳〵の椅子並〳〵置な
ら家業所々家々食事する飯盛大ふ
いろ〳〵あり
一上の間高き所ふ佛の匾額(ガク)置ゝ〳〵あり

椅子圖

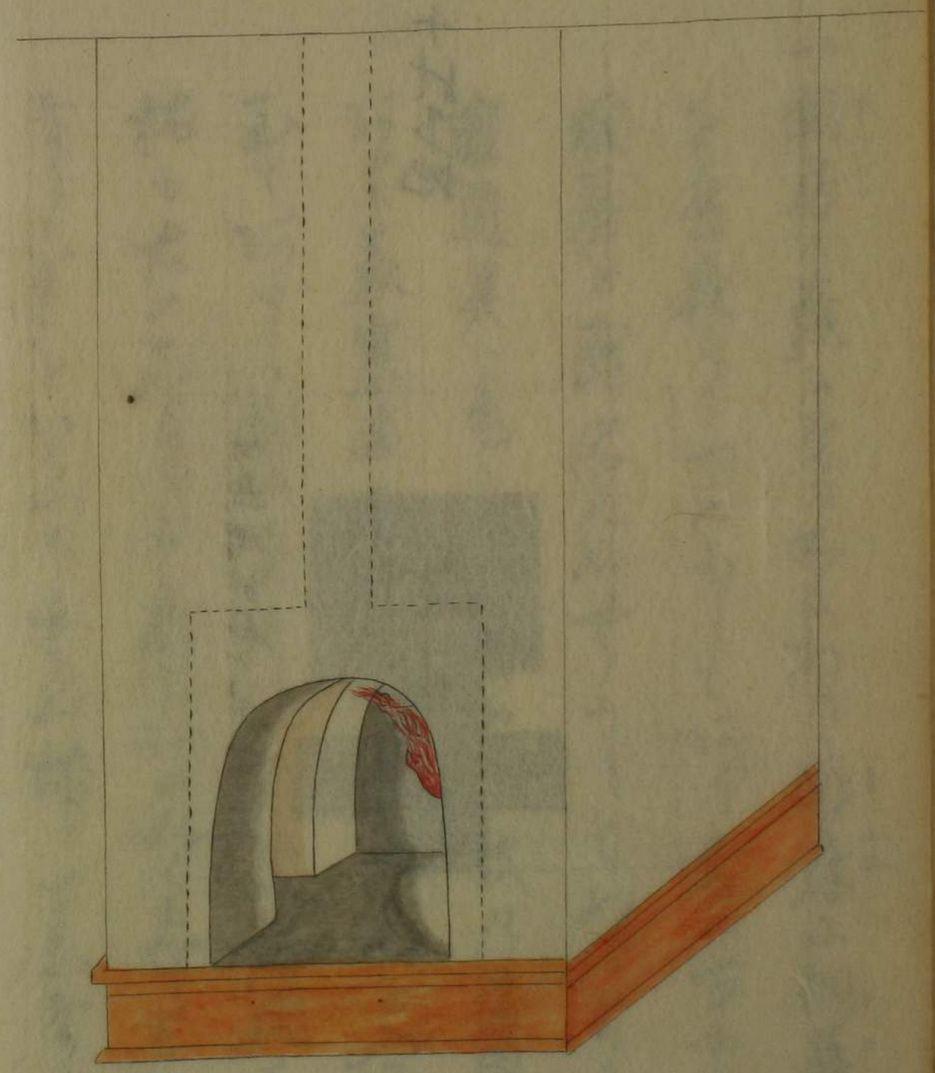


一閨房（ネトコロ）ハ蔭ヨケなるゆゑ床（ユカ）ふ褥（トコ）
を屋夜ともつねふして行ふ者の方ハ
暖簾（レン）を垂ケ入ぬ者ふしてあるなり
寝道具ハ色ともなしなし皮乃蒲団
ハ毛を入
ハ表裏共面の内へハ毛を入
玉て行ふ物なり是皮蒲団と
枕も大のごとくにして表ねのごとく表ものの
なるなりといふも寒ね枕とすふなり

へイチけ下地



ベイチ
全圖



上より見る物も蒲團ふ作るものあり
ふいろ〳〵れ物あり作りて持相さ
あるあり

一圖も二階ふ作るも片陰(カタカケ)ふかしふ内の為
板の出中ふ　　如此穴をあき置
後の穴の下ふ屋を作り用を便
上より下る文今筒行り下れ圊(セイチキ)ふ作つる
作つれい圊より流るるあり土地ふよる

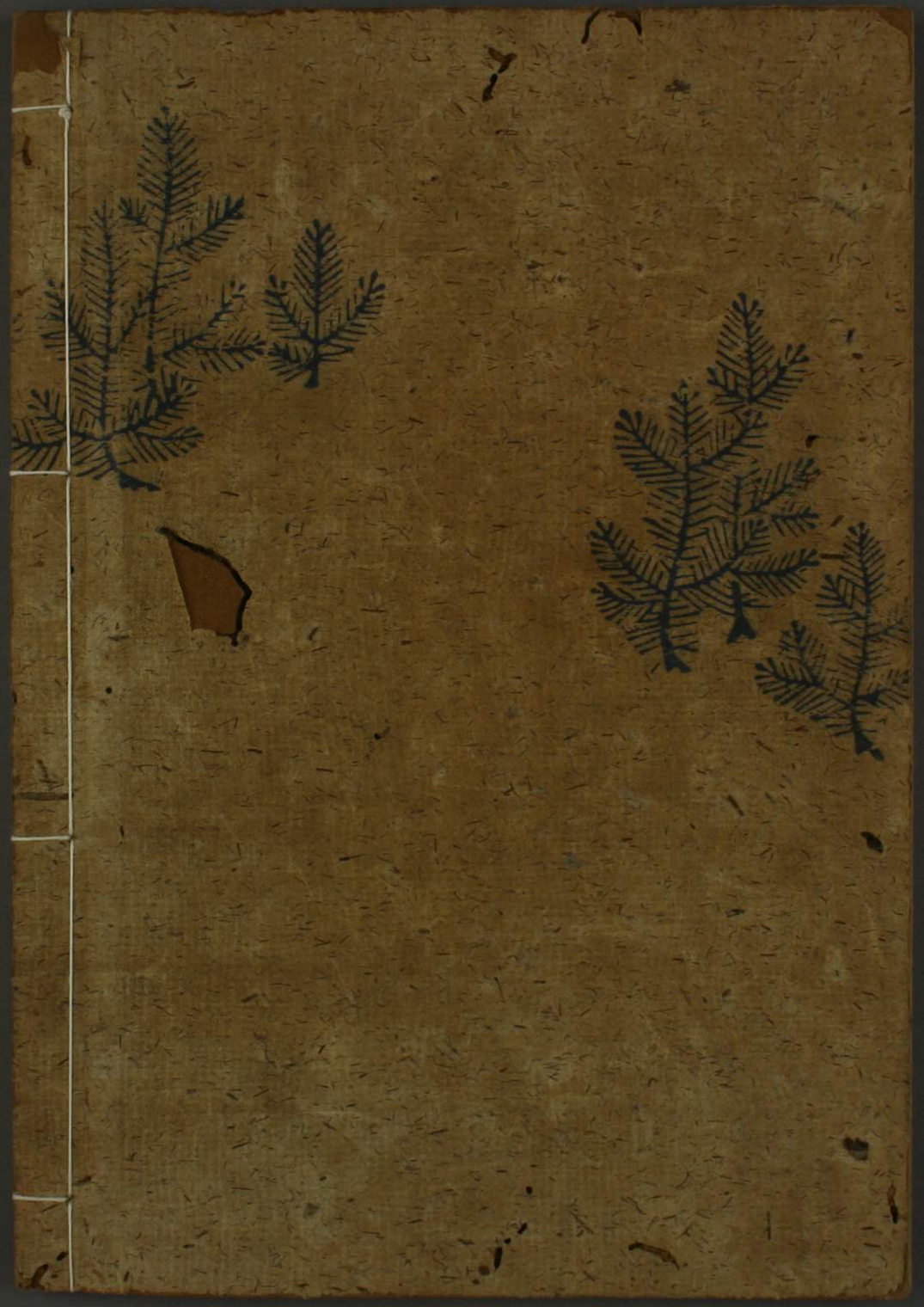
耕作のたやすくふつゝかなる事なきゆへ
すべて作業みな但稼業を障りとして生
涸筋（ドフトホリ）へ石原を埋りうくる事
一倉廩（クラ）を石造りなる家れ作る方と稼
かゝるゆへ但戸前格式まふすべきなり
なる家れ用ふい穴蔵多くこれ多く
き物を貯ふるゆふ設くこれ多く温ふ
夏い涼しき故和らくまさるふ家部
おそも必ず小き穴蔵あり裏れ内閑新
又野菜の類を内ふ貯ふ内ヶ清源
ある故物の格段すること夏も川
ふい解け稼の業行ふ故ふ穴蔵入
ても腐敗なもとあしと思ふときい大の
氷を川ふ切ふ基ヶ穴蔵の色くふ
積む時物をもて和を用ふゆへふ格
いふ事なし

一井は深く鑿り井こうを底より上をまであけるなり和は井桁を用ひて水流
汲むを絡つるべなり薬は川ながれて薬草
一風呂は如何風呂にて鍋この如く行り但
行燈まきたるなれて風呂屋を建川を仕方は
風呂石を積こと置て底下より火をたきこの
石をやく鍋やけたる時是ハ冷水(ヒヤミツ)をそそぎ
おこりけること出れふりて湯煙薬ふるそうて
この風呂充満して時風呂屋入口の戸を閉つ
裸人この入浴する者は垢(ヒキワカ)を掻ふ板結り
出て出れを陽川を熱湯の氣さふ蒸し
来る裸風呂は幾重ふも板を設くこの板の
上ふ人を裸(ハダカ)ふなりて入りこの湯氣にて體を
むすまり鍋の垢もとれ手足も柔ふ揺の
枝葉身のまくふるを垢(ツカ)箒(ハキ)のもくふして
この風ふをく人を是を以て自身ふかるを拭ふ

垢ちゝ落すに小桶ゝ冷水も入レ置て大気絡ふ堪ちられぬ形ちゝ新ふ汲ちを灌くゝ陸湯（オカユ）
ちゝ流しは方ふ用ひ形ちゝ出ておゆをはらひ
又入ルゝ月ふ四度ふ中ちちつ也見ハオシキリセンヤ
と云式日の子板ふハ必ずもゝ赤用井身を
清めるゝ市中銭湯もあり凡て昼通くゝ泡し
大勢入り込て賑ひて賑く搆へちゝ中ちちなり
入浴しつけさる者ハ久安用ふ堪ちし

浴者の登り
唐戸図

小楊枝の業付
の枝筆の図

慌原ふ水と湯
湯釜と蒸生
図

環海異聞巻之三